

神奈川 山梨教会連合会報

# かりん

## ご先祖様の御徳の中で

☆鈴木光政さんは昭和17年、東京で生まれました。信心は三代目になれるそうですが。

「僕は、幼少の頃から15歳くらいまでは千葉にいました。その後、千葉にあった2600坪の土地を売って、家族で横浜に引越しました。昭和33年の頃ですね。」

☆2600坪もあるなんて、裕福だったのでしょうかね。

「いやいや、それが色々あってね……。で、お金がないから親には『お金のからない高校へ行きなさい』って言われてね。千葉の学校では『何処でも行ける成績』と先生からも言われて余裕にしていたのだけど……。でもね、神奈川や東京のレベルは高かった！勉強の進みも早いから、着いていけなくてね。」

☆それは大変でしたね。

「それでも何とか高校はY高(横浜商業)の夜間部に入らせてもらってね。すると、周りは皆仕事をしながら学校に行っているから、俺も仕事をして神奈川教会(山田尚子

先生の甲)にお参り行って、夜は学校に行くようにしてた。高校を卒業したら直ぐ就職するつもりだったのだけど、父に『退職金が入ったから大学へ行きなさい！』って言われてね。それから2年ほど教会で御用をしながら勉強して。(神奈川の)吉田さんと一緒にね。その時、先生には親のようにして貰いました。掃除の仕方や常識を教えて頂いたり、み教えを自然と覚えた

川でスベって山でコロんで……とってきました

# Interview

第14回 鈴木光政さん(横浜西教会)



り、食事を頂いたりしました。

大学は、頑張ったけど駄目だった。で、受験に失敗した時、お結界でお届けすると、その時にお

結界御用をされてたミチ先生が『あなたにはあなたに相応しい道があるはず、まだまだこれからですよ』と言われて、先生の前で号泣しました。

☆仕事は、どうでしたか？

「仕事では色々な所から内定を貰って、結

局(明治屋(輸入品・食品卸や小売の大手))を選んで就職しました。当時まだ勉強に未練があった私に、先生は『同じ勉強するなら、食品の勉強をさせて貰いなさい』と教えて頂き、食品の勉強を頑張ったのです。すると、異例の速さで出世して。でも、年配の方から羨ましがられたり、妬まれたり、嫌がらせを言われたりしました。

その時、『人を軽う見な、人に恩を着せるな』と言う、み教えがバツと頭に出てきてね、自分は周りの人に助けられるんだから、と、どんな人にも丁寧に接するように出来た。すると、後輩からは好かれて、年配者も悪く言わなくなったね。浪人してたあの時の、自然と聞いて覚えたみ教えが……と、神様からのお道付けを感じました。」

☆その後、横浜西教会とご縁を頂いたのですか。

「ご縁があって買わせて頂いた家の隣が、尚子先生が布教に出られた教会になったので、びっくりですよね。それぞれ別のルートから買わせて買ったのですが、ここの教会はアットホームで、若い先生も尚子先生もお元気で、皆参りやすい。ありがたいです。」

☆昨年に定年退職をされ、今は自治会の副会長の御用をされているそうですね。

「ええ、母が痴呆になった時に、地域の人大変お世話になったので、少しでもお役に立ちたいと思いましたので……。」

## 布教の歴史をかえりみる

今年、横浜教会初代教会長福田助次郎師が帰幽されて百年を迎えた。そこで、改めて布教の歴史を顧みたいと思う。

神奈川県下で最初に布教が開始された地は商港都市・文明開化最先端の町横浜であった。明治21年に畑徳三郎師によって東京布教が開始され、その3年後に横浜在住の田中つ氏(後に金光教師となる)の懇請により、当時三重県上野で布教に従事していた近藤伊三郎師が横浜に来訪、横浜市山田町(現・中区)に布教所を設け、一時布教に従事したことにより、横浜に金光教の道が伝播する基が築かれた。

その経緯は、当時三重県上野教会で信心を勧め、芸妓紹介業を営んでいた目増利兵衛氏が、度々横浜に往来していた。その折、横浜市永楽町(現・南区)で芸妓置屋を経営していた田中つ氏が、目増氏から信心話を聞いて感銘を受け、また持病のおかげを蒙りたいとの願いもあって、自ら改式を願って近藤師を横浜に迎えた。近藤師の教導と祈念により、10年来患っていた病が完治するおかげを蒙った。

この救われた感激と、お道の助かり、有難さを難儀で苦しむ多くの人々に伝えたい、助かってほしいとの強い思いから、横浜で布教に従事してくれるよう、近藤師に

再三要請する。更には「先生が来て下さらねば、横浜5万戸の不幸にあたる」との手紙を送り、山田町に借家を作り神殿を備え、布教所の準備が整うなか、ついに田中氏の大願が叶い、近藤伊三郎師によって横浜市山田町で横浜布教が開始された。

ところが、本教が独立し本教を世の中に宣示する上で、横浜を布教拠点と考えた畑徳三郎師は、近藤師の元を訪れ「まことに勝手な頼みであるが、この横浜は東京の手で布教したいので引き取ってもらえぬか」と言い伝えた。近藤師も「自ら好んで横浜に来たのではないから、快く引き揚げます」と答え、信者一同に「誤解をしないよう、後継の先生を自分と信じて信心に励むように」と言い残し、三重県上野教会に引きつけてしまった。

その後、芝教会で入信、御用に専従していた福田助次郎師が、大場吉太郎師の命を受けて、明治25年2月同所山田町で布教に従事した。その教勢は、急速に伸張し「どんなことでもおかげを頂けると、横浜中で大評判となった。そして、横浜教会で入信した加藤忠蔵師が小田原で、喜多儀平師が山梨県で、増田金太郎師が神奈川県、福田助次郎師を助けるため一時横浜教会で御用に従事した田川達造師が横須賀で、それぞれ布教所を設けるなど、横浜教会を拠点

(3頁に、続く)

## 「もったいない」を伝えよう

外来語というのがあります。元々は外国語ですが、日本語として用いられるようになった言葉のことです。身の回りを見渡しても、カタカナで表現する言葉が非常に多く、そのほとんどは外来語です。外来語を使わずに話すことや書くことは難しい、と言っても過言ではないでしょう。

反対に、日本語が外国語として使われている例も少ないのですが、あります。古くはフジヤマ、ゲイシャなど、その後スシ、スキヤキ、サケ、エキデン(駅伝)、カブキ、ボンサイ(盆栽)などの日本文化を伝える言葉、また変わったところでは、ツナミ(津波)、も日本語がそのままの形で使われています。

一昨年、ケニアのマータイ環境副大臣(女性で、ノーベル平和賞を頂かれた)が、「もったいないという日本語を学びたい。もったいないを生活態度に取り入れたい。この概念を世界に広めよう」と発言されて話題になりました。

そもそも「もったいない」とはどういう意味なのでしょう。広辞苑に拠りますと、「畏れ多い」という意味もあるのですが、この場合は「そのものの値打ちが生かされず無駄になるのが惜しい」ということでしょう。

## 「女性のつどい」が 開催されました

六月二十九日(木)、小田原教会を会場に「女性のつどい」が開かれました。

次の日が上半期の感謝祭という教会の多い中、二十一名の参加があり、楽しく交流を深めることができました。

午前中には、小田原教会の方々のご案内で、動物たちとおしゃべりをしたりお花をながめたりしてのんびりと小田原周辺をブラブラさせていただきました。

午後からは、北川直敏さん(鎌倉教会)のボランティア活動のお話を、実技を交えながら聞かせてもらいました。北川さんの楽しいお話に引き込まれて、久しぶりに童心にかえって、歌ったり踊ったりで、みんなの顔もほころび心もほぐされていくようでした。北川さんにとってボランティアは第二の人生と言われます。お年寄りが涙を流して喜んでくださることに、ついっいのめり込んで行ったと言っています。今では、ハーマニカ、おしゃべり、車椅子ダンスにと、引っ張りだこで多忙な毎日を送っておられるようです。

その後の懇談でも、ボランティアや信心の話で盛り上がりましたが、それぞれのお話の中には、「人のお役に立ちたい」、「人

(2頁より続きます)

として、神奈川県下、山梨県下へと金光大神の道が展開して行った。

布教当初をみると、横浜が東京布教の拠点と位置付けられ、また教会で布教情熱を持った信徒が次々に輩出され「道伝え、人助け」を我が御用とし、その御用に自信と喜びを持ちつつ、世に向かって行った歴史がそこにある。

今、私たちに求められることは、この「道」を思う。人を思う。この布教情熱ではないだろうか。(登戸教会 南 清孝)

「やさしくしたい」という気持ち伝わってくるようでした。

家族など身近な人のお役に立ちたい、人にやさしくしたいと言う気持ち伝わってくるようでした。家族など身近な人のお役に立つことこそ大切と言うお話が心に残りました。

信心継承についても色々なお話を聞かせていただいたり考えさせられました。帰りきわには手話の復習をする姿も見られ、名残りを惜しみつつの散会となりました。

次回の「女性のつどい」にも、多くの皆様のご参加がいただけるよう、お待ちしております。

(吉岡 裕子)

もったいないという言葉が、アメリカのような大量消費国で、生活態度に取り入れようという運動が起ったというのなら、なるほど、さもあると納得するのですが、発展途上国の多いアフリカという土地柄で、「もったいない」に学びたいという発言に私は少し奇異な感じを受けました。

もったいない、は日本の価値観を表現する大切な言葉の一つです。そのものの価値を生かす、つまり命を生かす、ということです。学んで下さるのは嬉しく光栄なことですが、本家本元の日本ではどうでしょうか。現在37歳の娘が小学生の時に、「もったいない」と発言したら、同級生に「もったいないって、なに？」と訊かれたと言いたいものです。すでに、日本では失われつつある言葉かも知れないのです。

さあ、そこで、我々高齢者の出番です。もったいないに限らず、古く良き日本語とその言葉の持つ深い内容を、今時の若い者に伝えようではありませんか。

私は、品格、徳積み、実意(誠実)丁寧、調和などが好きな言葉ですが、皆様それぞれにお好きな言葉があたりでしょう。それらを若者に伝えていきましょう。よい言葉や内容は、時代を越え、国の境界を越えて、語り伝えねばならないのです。

(大塚 東子)

神奈川県山梨教会連合会主催

### 「社会活動に関する懇談会」

平成十八年六月十八日(日)十三時二十分より十六時まで、金光教鶴見教会にて開かれ、参加者は教師・信徒合せて三十五名ほどであった。須賀院連合会長の挨拶に引き続いて、今年四月から五月にかけて実施された「社会活動に関するアンケート調査」の集計結果について説明があった。

講師の東京センター次長・田林美千代先生からは、「本教における社会活動について」の一般的なお話と、「教団における社会活動窓口一覧」と「関東教区各教会の社会活動」についての具体的な説明があった。また活動の要件として、①社会活動のメリット(・未信者が入りやすい機会となる、

・社会への壁がとれる、・普段参らない人も参加する)②それぞれの教会に合った活動(先のことより実践することの方が大切)、③心の敷居をはずす(相手の立場に立つ姿勢)、④技術の習得(救急法など)が指摘された。

質疑応答では、①活動の継続性(次世代への引継ぎ)、②組織的な活動の必要性、③平和活動センターの資金と人材、④収集物の行く先についての情報不足、⑤教会と教団の役割、などが挙げられた。全体の懇談では、各教会で行われている活動について

て具体的な情報交換が活発に行われた。

最後に、木本

布教部長より挨拶があり、盛会のうちに閉会した。連合会としては、各教会の社会活動が益々活発になることを願いとして、①情報収集・発信の窓口作り、②情報交換の場作り、を推進してゆく。

### 教会連合会だより

◎「教師信徒懇談会 Part II」

日時 七月十九日(土)

十時三十分～十五時三十分

場所 金光教鶴見教会

テーマ 「金光教の活性化」

内容 意見発表と全体懇談

意見発表者

桜井 信一先生(鶴見教会)

山田 尚子先生(横浜西教会)

奥川 美智雄先生(平塚教会)

\*教会にお申込みの上、昼食は各自で用意下さい。



### 〈な・が・れ〉

#### 『感謝を忘れてしまった子』

丸子教会 栗原知子

金光新聞(五月七日号)に幼稚園のお昼時「いただきます」「ごちそうさま」をしながら園児がいる話載っていた。

私も同じことを相談されたことがある。「幼稚園には、お金を払っているから言わなくていい」と母親が園児に教えた。園の先生は、「お金を払っているからでなく、食べるものは色んな人が作ってくれているよ。それで、お母さんがご飯を作ってくれるし、お弁当も作ってくれるのだから、

「ありがとうございます、いただきます」をするのよ、って園児に言った。その子は、うちの祖母さんお弁当作らないよ。コンビニで買ってくるもん」と言った。それでも先生は、「ありがとうございます」と言う気持ちを教えないければと思います。と、私は言った。

感謝する心、ありがとうございますと言う気持ちを持っていて欲しい。忘れてはいけない。せめて金光教の信者の方が周りの人に伝えるだけでも、明るい未来が持てる世の中になっていくであろう、と思う。

金光教神奈川県山梨教会連合会

発行者 須賀院 明德

編集責任者 横山 光雄

川崎市中原区小杉御殿町二一八

〒211-0068 金光教武蔵小杉教会内